

阪神大震災の遺児・孤児に対する心のケア

八木俊介 樋口和広 富岡 誠 阿部俊彦
細見一雄 菊地可奈子 出水真寿美

(あしなが育英会レインボーハウス)

<要旨>

子どもの PTSD に対して長期的ケアが大切であることが強調されている。1995年に発生した阪神・淡路大震災で親を亡くした子どもたちへの心理的支援を、震災発生後、ほどなくからわれわれは試みてきた。その過程で、遺児・孤児のケア施設として一般寄付金によりレインボーハウスを神戸市に開設して3年を迎えた。施設専従員を中心として運営し、ファシリテーター(手助けする人)を養成して民間ボランティアの協力を得ている。災害後、歳月の経過とともに、親を亡くした子どもたちのトラウマは封じ込められて、開放されることが困難になってきている。われわれの行っている支援内容を報告し、子どもたちに施行したアンケート調査から遺児・孤児の一面を紹介したい。

<キーワード>

子どもの PTSD、災害精神保健、災害ボランティア、レインボーハウス

はじめに

あしなが育英会レインボーハウス(以下、RHと略す)は1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災直後から行った震災遺児・孤児の現地調査活動から始まった。あしなが育英会奨学金受給生が見出した遺児は573人であった。彼らに見舞金を提供すると同時に、遺児奨学金制度のあることを周知する活動を行った。この過程において、これらの子供たちへ長期的な心理的ケアを提供することの重要性を痛感し、募金活動を継続して、1999年1月、神戸市東灘区にRH(敷地1,351.83、延べ床面積2,685.60、鉄筋五階建て)の運用を始めた。

ケア・スタッフは当初4名(現在6名)、他に管理部門職員がいる。米国で遺児ケアを行っているダギー・センターから専門家を招き、一般から公募したボランティアに対してケア技術の研修(これまで3回)を行い、修了者をファシリテーターとして子どものケアに従事してもらっている。

心のケアの狙い

大震災などで親などを失うなど大きな喪失体験を味わった子供たちは、年を経るに従って日常生活の中では被災に由来する苦悩、不満、苛立ちを語る事が困難になり、それらを心の

うちに秘めるようになってきている。それを吐露することで心の傷を癒すことを狙いとしている。スタッフ内部ではこれを「吐き出し」という言葉で語っているので、本報告でもこの表現を用いて述べることにしたい。

子どもはカウンセリングのように言語化して内面を語る事がまだできないため、個人や集団の対応による描画、遊び、遊具を用いてのプレーを通して「吐き出し」の機会を提供している。RH内部には、遺族の写真を飾って1人で泣くことのできる「おもいの部屋」、怒りをぶつけるようにサンドバッグを吊り下げた「火山の部屋」と名づけられた場所など、さまざまな工夫が凝らされている。

さまざまなケア・プログラム

1) グループタイム

小学校1年生から大学生、さらに一部若い社会人までを対象に、年齢・性で分けられた4-5名の6つの集団(他に自由参加の混成集団がひとつある)が、月2回、1回約2時間のつどいを行っている(交通費はRHの負担)。それぞれのグループに1名のケア・スタッフ(ディレクター)を定め、ファシリテーターが2-3名配属される。仲間が嫌がることをしない限り、このグ

ループでは泣いても暴れていても良く、遊びやゲームを通じて「吐き出し」の機会を提供する。比較的均質的な参加者であり、過程や学校で禁止されている言動が許容されるという意味では、非日常的な時間ということができる。

2)土曜のつどい

月1回、年齢・性別に関わりなく、震災遺児・孤児とその家族は誰でも参加できるつどいである。特定のケア・スタッフは設けていない。ここでは、グループタイムに参加できない・したくない子ども、家族など保護者をケアすることを目的としている。陶芸教室やミニ・コンサート(ケント・ナカノ氏や千住真理子氏などが協力してくださった)を催したり、お父さんの料理教室を開くなど、工夫している。前項と比較すれば、日常生活の延長線上の営みといえる。

3)年間行事

これは宿泊を伴う行事であり、年に3回企画している。内容は、夏の「キャンプのつどい」、年末の「クリスマスつどい」、春休みの「スキーのつどい」である。前項2者と異なり、自宅を離れて暮らす、寝食をともにすることなどで、普段は語れないことを口にする機会を見つけて「吐き出し」の効果を高めることができる。この企画では、あらかじめ設定された「吐き出し」の時間がある。

4)その他

これらの意図されたプログラムの他に、曜日に関わりなく保護者や子どもが来館して、遊んだり、語らったり、職員と交流したりという日常があり、そういった関わりが、さまざまなケア・プログラムの有効性を高めている。

あるアンケート調査から

震災後、子どもの心の傷を客観評価すること、時間経過によるその変化をわれわれは把握することを期待していたが、同時に調査を行うこと

自体が子どもの傷を深めたりはしないかという恐れを持ち、ためらいを抱いていた。しかし、何らかの計測は必要とあると考え、2000年の春に行ったスキーのつどいの際に、簡単なアンケート調査に参加した子供たちに求めた。この機会を用いたのは、スキーのつどいはRHが完成するより以前の1996年春から行っていて職員が事情全般を把握しているという安心感があること、時間・空間を共有しているという安全な閉鎖性、数日間生活をともにするという状況であるため、アンケート調査を行ったことでフラッシュバックする子どもが出たとしても、帰宅までにそれなりの対応ができると判断したこと、などによる。本2001年3月のスキーのつどいにおいても同様の調査を行った。

2年間のアンケート調査結果を表1に示す。4ないし5段階回答の質問紙を用意したが、本報告では簡略に結果を示すために各設問に関して両端の回答のみを表示している。

被災時の平均年齢は、2000年のつどいでは7.3歳、2001年では6.3歳であった。スキーのつどいは、ほとんどの子どもにとって楽しいものであったようである。学校生活にはおおよそ適応してきているが、授業についていくことに困難を感じている子どもがかなり多い。生活状況の激変によって学業に集中できない子、諦めを抱いている子が日常のつどいでも観察されており、そのことを設問4の数値は反映しているであろう。

地震の記憶がない子どもが増えている(設問5. 8)。震災時0歳であった子どもが2000年春に全員就学年齢に達して、地震の直接記憶を持たない子どものRH利用が相対的に増えていることを示している。地震体験を記憶していない子どもも日常的に保護者たちから震災関連の負の情報を注入されており、その結果して設問6. 7のように災害主題を回避しようとする子どもを多くしているのではないか。

今後の課題

RHが発足して3年目に入り、利用者数(延べ数)は急増しはじめています。その理由は明らかにし得てはいません。ケア担当職員はダギー・センターの専門家の講習を受けているとはいえ、専門教育を受けているわけではなく、技術的に不安を抱きつつケアを行っている。職員やファシ

リテーターのブリーフィングについても、まだ適切な対応を行えていない。運営費はすべて寄付によって支えられているという財政的不安定さもある。2001年度からは児童精神科医が週1日非常勤で来館してくれることになったので、技術面で再点検を行いたいと考えている。

表 1

2000年(56名)

2001年(43名)

質問	質問内容	2000年(56名)		2001年(43名)	
質問1	スキーのつどいは楽しいか?				
	1 楽しい	55	98.2	40	83
	2 つまらない	1	1.8	2	4.7
質問2	学校は好きか?				
	1 好き	33	58.9	20	46.6
	2 嫌い	5	9	5	11.6
質問3	勉強は好きか				
	1 好き	17	30.4	10	23.3
	2 嫌い	30	53.5	15	34.9
質問4	学校の授業は分かるか				
	1 分かる	41	73.2	32	74.4
	2 分からない	11	19.7	7	16.3
質問5	地震時の家や家族の様子を覚えているか				
	1 覚えている	43	76.8	23	53.5
	2 覚えていない	13	23.2	20	45.6
質問6	地震の話をするのは嫌か				
	1 嫌だ	28	50	18	41.9
	2 嫌でない	28	50	22	51.2
質問7	地震の話の聞いたりテレビを見るのは嫌か				
	1 嫌だ	13	23.2	13	30.2
	2 嫌ではない	43	76.8	29	67.4
質問8	亡くなった父や母がどんな人か覚えているか				
	1 覚えている	39	69.7	19	44.2
	2 覚えていない	15	48.2	23	53.5
質問9	亡くなった父や母のことを家族と話すか				
	1 話す	36	64.3	24	55.8
	2 話さない	18	32.1	18	41.9
質問10	亡くなった父や母に会いたいと思うか				
	1 会いたい	44	78.6	34	79.1
	2 会いたくない	7	12.5	6	13.9

※無回答は省略